
コードギアス～ロシアより愛を込めて～

スターリン万歳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス〜ロシアより愛を込めて〜

【Nコード】

N0696X

【作者名】

スターリン万歳

【あらすじ】

皇暦2014年。本編では全く語られなかったロシアの大地を舞台に、いま新たなギアスの物語が始まる。

凍土を穿つ砲弾の嵐、母親の名を泣き叫ぶ兵士、占領地では陵辱された市民の怨嗟の声が戦場に木霊する。

ここは優しい嘘なんてない唯一つ力だけが真実の世界。

君は世界を壊せるか……。

日本占領（前書き）

これはスレのもしコードギアスの世界にソビエト連邦があったらを元にしてもいいです。

オリジナル要素も入れますが、大体が原作に沿って書いていきたいと思っています。

それでは本編をどうぞ。

日本占領

皇暦2010年

日本に埋蔵される膨大なサクラダイトの分配を問題とし、日本と超大国ブリタニアとで戦争が勃発。

世界のおおよそ三分の一以上を領土とするブリタニアの前に、日本は瞬く間に本土へと上陸される。

ブリタニア軍新兵器^{ナイトメアフレーム}KMFをもって日本国土を電撃的に侵略したブリタニア軍を前に。

日本は僅か一ヶ月足らずで降伏した。

日本首相枢木ゲンプは自害して果て、ここに日本は滅亡する。

その二週間前・・・

ロシア連邦ウラジオストク港から夜陰を縫うようにしてロシア艦隊が出撃する。

強襲揚陸艦三隻、キエフ級重航空巡洋艦、モスクワ級ヘリ空母二隻、ミサイルフリゲート、駆逐艦、攻撃型潜水艦多数からなるロシアの極東艦隊は静かな夜の海を沸き立たせながら進んでいく。

極東艦隊ミヒヤエル・グレコビツチ提督は旗艦スラヴァ級ミサイル巡洋艦ヴァリヤークのCICでじっと海図を睨みながら航路の計算を行っていた。

「同志グレコビツチ提督、予定海域にあと三十分ほどで到達します」
「了解した、では予定海域に着き次第回頭しこれより作戦の第二段階に移る」

今回のロシア極東艦隊の出撃は樺太自由経済特区の邦人保護を目的と説明されているが、実際に艦隊は樺太の手前できびを返すように南へと針路を向ける。

この動きに慌てたのがブリタニア軍に九州から上陸され、近畿にまで防衛線を後退していた日本であった。

戦争前ブリタニアとの開戦が避けられぬと見た日本政府は各国との間で外交努力が行われたが、ロシア連邦とは不可侵協定を結んだばかりなのだ。

この明らかに条約違反の行為に日本外務省は大使館経由でモスクワに遺憾の意と説明を求めが。

結局それ以上のことは出来なかった。

ブリタニア太平洋艦隊との海戦で日本の機動戦力は壊滅し残っているのは沿岸警備用の貧弱な艦艇ばかりであり、ロシア艦隊と真っ向から立ち向かえる戦力など残っていない。

そして遂にロシア艦隊が北海道日本海側の沖に姿を現す。

そして遮るものがない中悠然と上陸を果した強襲揚陸艦からは装甲車と戦車が吐き出され、北海道の大地にロシア軍が降り立つ。

モスクワ級を發したヘリボーンが函館千歳空港を瞬く間に占領し、シベリアを發した輸送機の編隊が降り立つ。

空港に取り残された怯える市民達を前に、ロシア陸軍機甲師団が輸送機の腹から姿を現し市街地を疾走する。

「こちら千歳航空基地、現在ロシア軍機と思われる航空機に爆撃を受けている。至急援軍を請う、繰り返す……」

北海道に展開していた日本軍の殆どを本土決戦の為引き払っていた隙を突かれた日本軍には、対して重装備など残ってはいなかった。

「くそ、戦車や戦闘機相手にライフルで戦えつてのかよ!!」

「わめいている暇があったら呼び続けろ、少しでも多にこのことを知らせるんだ」

必死に通信機の全チャンネルを開いて呼びかけるが、彼等の苦勞が報われることはなかった。

ロシア本土から出撃した爆撃機編隊が残存する日本陸軍の拠点を爆撃で風潰しにし、残っていたのは最早彼等だけであった。

それでも彼等は呼びかけるのを諦めず、通信塔にロシア軍歩兵がなだれ込むまで彼等の抵抗は続いた。

ブリタニア開戦より僅か二週間でロシア連邦から日本に突きつけられた要求。

北海道、東北及び佐渡島、能登半島にロシア軍の進駐を認めること。
事実上の宣戦布告であたが、近畿を突破され首都東京の目の前にまでブリタニア軍が日本は要求を呑まざる終えなかった。

国際社会でもロシア連邦の非道に非難の声が集中するがロシア連邦は極東艦隊は北海道上陸から三日ごには新潟に上陸。

太平洋側にも姿を現したロシア艦隊の多方面上陸作戦を前に、日本軍は忸怩たる思いを抱きながら政府の命令とあつては後退していくしかなかった。

新潟県某市、橋を挟み向こう側にはロシア軍から逃れる避難民での群れでこつた返していた。

誘導する警察や消防、軍の顔色は良くなく生まれ故郷を捨てなければいけない人々の中には悲しさの余り泣き出すものもいた。

家財道具一切をトラックや車に積み、人と車とで渋滞する端の向こう側にはロシア軍の姿がちらほらと見え始めている。

「なんでこうなったんだよ。政府の馬鹿やろう！！」

「おい、声が大きいぞ」

「うるせい、やってられるかよ。どうしてオレ達が生まれ故郷を露助なんかにくれてやらなくちゃいけないんだ」

避難民を誘導する為歩哨に立っていた兵の一人がライフルを橋の向こう側に向ける。

「見てろよ、絶対に俺達の故郷を取り戻してやる」

そしてライフルのトリガーに手をかけ、

「止める。発砲禁止されているんだぞ」

同僚の制止の声に兵士は力なくライフルを下げる。

その顔には苦渋の涙を浮かべ、何度も何度も

「チクシヨウ、チクシヨオおおお」

と唇から声が漏れ出した。

ロシア軍が日本に上陸した事を知ったブリタニア軍では本国の指示ゆえロシアには手出しならんと厳命を受けていた為当初の予定通り日本の首都東京を目指していた。

「しかし何でロシアは今になって日本に戦争を吹っつけたんだ？火事場泥棒もいいところじゃないか」

トラックに揺られながら、爆撃され廃墟と化した町の中をブリタニア軍の兵士たちが他愛のない会話をする。

「お前そんなことも知らないのか。まったく俺がいい事を教えてやるよ」

同僚を呆れるような目で見たブリタニア兵はライフルを担ぎなおし身を乗り出して耳元に手を当て小声で言う。

「ふむふむ、へーって！？それ本当か」

「馬鹿声が大きい」

幸いトラックが走る音で無知な同僚の声は同乗する兵士達には聞こえなかったが、知ったかぶりの兵は冷や汗を流す。

「悪い、でもブリタニアとロシアが同盟だなんて信じられないよ。だってつい此間だってベーリング海峡で一悶着あったんだろっ」

実際戦争が始まる以前から、いやブリタニア建国いらいからロシアとの中は常に緊張関係にあったといっている。

前大戦で同じ連合国の立場に立ったとはいえ、超大国並び立たず。

どちらも相手を覇権を握る為の最大の障害と見なし、ことあるごとにぶつかり合っているのだ。

「お前何にも分かっちゃいないな、それこそ政治だよ政治。表で喧嘩してても裏じゃ手を結んでいるなんてよくある話だ。第一今の皇帝陛下が火事場泥棒を許すような方ではないだろう」

知ったかぶりの兵士が政治を語るが、彼も実際そんな事があったとは知らないし全て彼の想像のなかだ。

「ま、オレ達庶民には全く関係のないことだ。お上のことはほっといて俺達は戦争のおこぼれに預かるうじゃないか」

兵士は同僚の肩に手を回しながらニヤリと笑みを浮かべる。

この戦争もあと一週間くらいで終わる。

そうなれば彼等は故郷に帰れるし、その前に占領地で一稼ぎすることも出来る。

東洋系は意外とブリタニアでは人気があるのだ。

何がとは言わないが、勝者はなにをしても許されるというブリタニアの国是に従い彼等もまた勝者の権利を存分に行使するつもりでいた。

こうしてブリタニア開戦から僅か一ヶ月、枢木ゲンブ首相が自害し日本はブリタニアに無条件降伏した。

占領された日本はエリア11としてブリタニア植民地として併合され、以後日本人たちは国と名前を奪われ国土を分断された。

偉大なる雪の国

ロシア連邦

ユーラシア大陸の過半を領土とし東欧、中東、北アフリカに多くの衛星国を抱え、ブリタニアと世界を二分する超大国である。

その首都モスクワクレムリンの大統領執務室で、この国の大統領であるウラジーミル・プーチンは日本の占領が完了したとの報告を受けていた。

「同志、チャシェンコフ」

クレムリン赤の広場を背にした執務室の中には、ウラジーミル大統領ともう一人の男の姿があった。

男は一步前に進み出て、背筋を伸ばす。

「同志チェシェンコフ、君はこれから直に日本に飛び現地のブリタニア軍と交渉に入れ。極東軍も場合によっては動かしてよい、ブリタニアと我ロシアの占領地への不可侵を誓わせるのだ」

スラヴ的顔立ちをしたチャシェンコフはのっぺりとした髪を更にオイルで塗りつけたような脂ぎった髪をてからせながら緊張した面持ちで言う。

「同志ウラジーミル閣下、場合によってはと言いますが一体何処までのことを御望みでしょう」

彼としてはブリタニアとの交渉等今までも何度も行ってきた別れに緊張しているわけではない。

彼が恐れるのは今日の前の男、この国いや世界の半分の支配者たる男の腹のうちを汲み取らないばかりに肅清されていた者を知っているからだ。

その為、自分が考えていることとウラジミル閣下の考えが同じかどうか、それこそが最も重要なのだ。

「決まっている、我ロシアは卑劣な攻撃によって瀕する日本を救う為に軍を出したのだ。よって我ロシアの意思は日本の独立だ、この為には何としてもブリタニアの介入を未然に防ぐ必要がある」

決まった。

今この瞬間より男の発言は何を犠牲にしても必ず成し遂げなければならぬということがチャシエネンコフの中で決まった。

チャシエネンコフは喉かカラカラになりながらも、搾り出すようにして何とか一言だけ言う事が出来た。

「はっ、必ずや同志閣下」

話はそれで終わった、チャシエネンコフ恭しく一礼して部屋を後にす急いでクレムリンの長い廊下を足早に駆けていく。

一刻も早くこの場を離れたかったことと、今から自分にKGBの監視が24時間張り付くことを知っているからだ。

閣下の重要なご意思を妨げるものがないように護衛するという点で一つ、もう一つは失敗した場合チャシェンコフを処分する為に護衛という名の監視が彼を駆り立てるのだから。

チャシェンコフが部屋を出ると、徐にウラジーミル閣下は革張りの高級椅子から立ち上がり窓の外から見える赤の広場へと目を向ける。

そこにはソビエト当時では考えられないほど人と活気で溢れ、ロシアが最早各国の後塵を拝する二流国ではない証に思えた。

ウラジーミルはここ二十年のことに思いを馳せる。

ソビエト社会主義の限界、それによるソビエトの崩壊と衛星国の離反。

国家崩壊に付入りハイエナのように群がる列強。

その危機の最中、偉大なる同志ゴルバチョフ大統領は崩壊するソビエトを再生させ、ことさらブリタニアの脅威を強調することで国内を纏め上げた。

その舵取りが如何に困難だったか、ブリタニアが本格的に介入すればこの国は間違いなく地図から姿を消していたはずだ。

国内の反対勢力を政治の影で抹殺し、対ブリタニア穩健派と目されていた男の突然の態度の豹変は国内外を大いに震え上がらせた。

ゴルバチョフ大統領亡き後も歴代のロシアの指導者たちは非常に困難な時代に大きな舵取りや方向転換を幾度となく強いられその度に国民に大きな出血を強いた。

しかし、それも今は過去のこと。

現在のロシアは嘗ての威光を取り戻すどころかそれ以上に発展している。

北欧、東欧は勿論、モンゴル、中東のイラン、イラク、アフガン、パキスタン、トルコ、シリア、アラブ、エジプト、アフリカの社会主義国家を取り込みキューバやアフリカ、東南アジアそれに南ブリタニア（南米）での革命闘争はまだ終わってはいない。

中華連邦、E Uを向こうに回して世界で唯一ブリタニアと単独で渡り合える国力。

これが嘗て欧州にアジアと蔑まれ、社会主義の停滞による経済の衰退で何百万もの餓死者を出した国が僅か二十年の間でここまでの大躍進を遂げたのだ。

今思えば奇跡と言ってもいい。

そしてウラジミールは自分がその幸運を勝ち取ったと自認している。

そう、全てはあの日から始まったのだ。

ソビエト崩壊の前夜私が見つけたのだ、世界の全てを掴み取る力を。

「いかな、少々昔のことを思い出しすぎたか」

ウラジーミル閣下はそう呟くと頭を振って昔の記憶を頭の中から消し去る。

「さて、シャルル皇帝はどう動くか。いや動かせるかだな」

ウラジーミル閣下はもう一度だけ窓の外を一瞥すると、再び政務を行つた執務室の机へと戻っていった。

交渉テーブル

皇暦2010年東京近郊ブリタニア軍野営地

日本がブリタニアに降伏し一週間が経過し、本来なら条約を取り交わし正式に日本の降伏とブリタニアへの主権移行が行われ戦後処理もたけなわ・・・という訳でもない。

実際ここ一週間、ブリタニア兵が唯の一人たりとも東京の足を踏み入れていないという事実が、このなんともいえない微妙な緊張感を孕んだ空気が流れ。

その理由はおのずと川向こうの町に目を向ければ分かることだ。

現在ブリタニア軍は東京から五キロの地点で野営地を建設し待機しているが、愛知方面からもロシア連邦極東陸軍が展開し非常に微妙な均衡状態が続いている。

というのも、日本降伏の前後にロシア連邦が突如として首都東京の邦人保護を名目に以前の条約には含まれてはいない茨城、千葉、埼玉に進駐した。

これに驚いたブリタニア軍はロシア軍を牽制する為に急遽進軍を早め首都東京を包囲。

ロシア兵を一兵たりとも入れない構えを見せる。

緊張する両軍の間ではあわや日本を舞台にブリタニアとロシアの戦争かと実しやかに囁かれていた。

各国から集まった報道陣や観戦武官も大使館経由で逐一情報を本国へと送り、ブリタニア首都ペンドラゴンでも外交官が慌しく動き何時でも全軍に出撃を命じられるよう皇帝シャルルは玉座のまでとしりと構えて腰掛けていた。

だがここでロシア連邦が動きを見せる。

大使館経由で現地での会談を申し込む代わりに一部ロシア軍の包囲を解くと送った。

その旨をペンドラゴンにつめる外交官が緊張の面持ちを浮かべながら皇帝シャルルに報告し、その裁可を仰ぐ。

ただ皇帝陛下は無言で頷かれたと、この時皇帝付き書記官は書いた。

この無言の意味が何を含んでいたのか、後々まで興味は尽きないが皇帝の許可を得たことで両軍のとも何時でも戦争を始められるように準備しながら両軍とも使節団を派遣する。

ブリタニアの代表とロシアの代表とが双方少数の護衛を連れたのみで両軍の中間地点で張られた天幕に入っていく。

まずお互い儀礼的な挨拶から始まり、早速会談が行われた。

「ではロシアの今回の進駐は侵略の意図はなく邦人保護と旧日本政府との合意のもとという訳ですな。それを信じると？」

ブリタニアの代表団が疑いの目を持ってチャシェンコフを見る。

「ええ、既に条約を取り交わしここにちゃんとした証拠もあります。これは日本降伏前に交わされた物で国際法に照らし合わせてもなんら疑いのあるものではありません」

ぬけぬけとチャシエネンコフが図太く正当性を主張するのがロシア的な外交術の一つだ。

「ですが些か軍の規模が大きいのでは。これではロシアが日本とブリタニアとの戦争に浸け込んで火事場泥棒を働いたようにしか見えませんが。そもそも日本降伏の日本の主権は我国に譲渡されている、ここは最早ブリタニアの地だ、ロシア軍は即刻撤退すべきだとブリタニアは主張する」

ブリタニアの外交官が高圧的な態度に出るが、実際彼等は恐れているのだ。

もしかしたら日本軍とロシアとの間で密約が交わされ東京を包囲中のブリタニア軍を更に取り巻くロシア軍が、東京を守る日本軍と内外で呼応すればブリタニアは一たまりもない。

実際に戦争になればブリタニアは負けはしないが、むぎむぎ敵の策に嵌ったとして皇帝シャルルからどんなお叱りを受けるか。

勝者には寛大で敗者にはことのほか厳しい方でいられる皇帝陛下の顔を思い出しブリタニアの代表は身震いする。

「その理由につきましてはブリタニア軍の占領地での”活躍”はよく知っておりますからな。邦人に万が一がないようこの程度は必要な処置ですよ。お互い占領地で”事故”は起こしたくはありませんからな」

チャシェンコフの言う活躍とは無論占領地でブリタニアが行う苛烈な統治のことだ。

実際問題ブリタニアの植民となった国の邦人がどのような処遇になるか、それこそブリタニアの胸先三寸で決まるのだ。

そして事故とは嘗て第二次世界大戦末期、ドイツを占領したソビエトとブリタニアがドイツの高速道路アウトバーンで行われた戦車戦を敵と誤認した事故として処理したことに由来する。

以来占領地での他国との戦闘は大概この事故という表現で済まされている事への皮肉である。

憎憎しげなブリタニア外交団はそれでもなお追求の矛先を緩めない。

「我ブリタニアは国際法を尊重する国家だ。こちらモロシアの占領地での活躍は聞き及んでいる、貴国のほうこそ事故を起こしたがつているのではないですか」

「ほほう、ではお聞きいたします。此度のブリタニアと日本との戦争は一体どのような理由で開戦なされたので？」

国際法には宣戦布告は正当な理由無しには行えないと記載されている。

今回ブリタニアは無論宣戦布告文を出しているが、それを鵜呑みにするようなやからはここにはいない。

「それは、我ブリタニアはパックスブリタニアの為世界の新たな

秩序の構築と・・・・・・・・」

正直に侵略の為とは言えない辺り、ブリタニア代表の雄弁な声が段々と尻すぼみになっていく。

「ほう？ではブリタニアは世界を統治する唯一の国家と。それはおかしい話だ、我ロシアは無論中華連邦もEUも貴国の統治下にあるというのは初耳ですな。今の話を聞いたらさぞかし驚くでしょうな」

今の発言は間違いなくブリタニアの失言だが、まあ実際問題EUも中華連邦もそんなことは百も承知ではあるがいまここにいるブリタニア代表団の発言はそのまま国際的なブリタニアの発言として記録される。

つまりは今この瞬間ブリタニアはEUと中華連邦、そしてロシア連邦に喧嘩を売ったのだ。

「いや違う今の発言は・・・・・・・・」

「書記官、今の発言を確りと記録してくれたまえ。早急に本国に送らなければ」

意地の悪い話だ。

実際こんなことでEUも中華連邦もブリタニアとは戦わないが、外交のカードとして使うだろう。

そのことを分かっているブリタニア代表団の顔は皆青白くなっている。

この分だとすんなりとブリタニアとの不可侵を結べそうだなとチャシエネンコフはほくそ笑みながら交渉を続けた。

北海道札幌

ロシア軍に占領された北海道や東北地方だが以外にその統治はスムーズに行われていた。

ロシア軍がよく起こす占領地での活躍もなく、日本が降伏したという混乱はあるものの比較的最小限に収められていた。

この地方の市民感情としては複雑の極みだが、ブリタニアによって日本人を失うよりはロシアの方がまだ信用できる。

実際各市町村の行政はそのまま機能しており、一定の制限を設けられてはいるがここは戦火とは程遠い平穏な日常の風景が残っていた。

ここに一人の男がいる。

実島キサオ、国会議員であり枢木ゲンブ政権時では党内で頭角を現していたやり手である。

ゲンブや京都グループがブリタニアに国を売り身の安全を得たように実島もまたロシアを引き入れることにより日本という国の存命を

彼なりに図っていた。

ロシアと日本との関係は良くも悪くも互いに気が抜けない間柄といえる。

北方領土問題や軍事的圧力、サクラダイトの分配を巡り常に争っているように択捉島を経済特区として認めるなど中々一概にこれと言えないのが日本とロシアの関係だ。

だがブリタニアとの関係が悪化することで状況は一変する。

ブリタニアによる世界制覇パックスブリタニアを掲げる皇帝シャルルは日本へと矛先を向けた時ロシアは大きな危機感に包まれた。

中国の諺で唇亡びれば齒寒しで日本の存在がブリタニアの圧力を分散させていたし、アジアにおけるブリタニアの植民地化の防波堤の役目を担っていた。

それが崩れようとしている時、ロシアでも大きく意見が分かれた。

ブリタニアと同調して日本を攻めるという案と、外交的な手段には訴えるが様子を見計らい静観に徹するかだ。

実島はロシアの動揺を注目し枢木ゲンブにロシアを日本に引き入れるよう進言する。

これは万が一の保険という意味を含ませているが、ゲンブま唯で日本をくれてやるような男ではない。

ブリタニアでの地位を約束されても矢張りいざと成ったら掌を返さ

れる恐れもある。

その為にも亡命先としてロシアを選ぶように仕向けその代わりとして北海道と東北を敢て手薄にしてロシアに割譲するということだ。

日本を舞台にブリタニアとロシアとが対立すれば日本の元首相であり京都グループとも繋がり深いゲンブの価値は増す。

だが実島もここで終わるようなことはしない。

極密文書でロシアとの密約を交わす傍らに戦後日本の独立を盛り込んだのだ。

ロシアとしてもアラスカとベーリング海峡、更にアフリカでブリタニアと国境を接する関係上日本にアジアにもう一つの戦線を抱え込むのはリスクがいる。

そこを突いて敢て日本を独立させブリタニアとの緩衝地帯として用いるよう実島は文章のそれとなく匂わせ自身もまたそれを実現する為に動き始めた。

東北、北海道を万が一の国土での戦場となった場合後背地として活用するという名目で上陸が予想される九州四国中国地方から工場を疎開させ資源の備蓄も開始する。

その逆に日本軍を九州四国中国地方に移しロシア軍との衝突を必要最小限に抑えるよう手を加えた。

人と資源工場を移し、短い期間の中予定を上回る効果を上げた疎開はことさらにマスメディアでブリタニアの恐怖を煽った影響もあり、

着実に実島のシナリオどおりことは進行していた。

日本とブリタニアが開戦した時、既に実島の姿は首都東京から消え北海道札幌に移した資産と共に戦後日本の独立のさい組閣の陣容を詰めていた。

だが、戦争は実島が思ったよりも早く決着してしまう。

ブリタニアが投入した新兵器ナイトメアフレームの戦果が声高に主張されるが、実島はブリタニアの強硬な進軍の理由がもしかしたらロシアと日本が交わした密約が漏れた可能性があるを見た。

本来なら中国近畿地方でブリタニア軍に抵抗しつつジリジリと後退しその隙にロシア軍を引き込み東京まで進駐させるつもりであった。

サクラダイトの世界最大の埋蔵量を誇る東海をブリタニアに、関東をロシアとに分け戦後独立の経済的基盤を確保する予定が狂ってしまった。

急遽予定を変更しロシアが強硬な策に出るが、実島としてもここは状況に任せるしかないと考え暫く札幌で事態を静観していた。

ブリタニアとロシアが東京を包囲して会談を行っている間も実島は東北北海道を取り纏めに奔走している。

実際このタイミングでは戦争にならないとの読みで動いているが果たしてブリタニアがどう動くか。

それだけが気がかりでなかった。

東日本共和国（前書き）

段々架空戦記臭がしてきました。

東日本共和国

ブリタニア帝国ロシア連邦との会談の結果ロシア軍の邦人保護を名目とした一部軍の東京進駐を認める代わりに現在包囲しているロシア軍を撤退すること。

東北、北海道、などの領有については後日別途に会談を設けること。
東京においてはブリタニアの利益を損なうようなことをしないということで一応の締結を見て、ブリタニアロシア両軍の奇妙な混戦部隊が東京へと入っていく。

国会を占領したブリタニア軍は早速日本の降伏文章にブリタニア軍司令官自らが調印し、まるで狸にでもつままれたかのような顔をした議員等を前にさっさと皇帝シャルルへの報告の為に国会を後にした。

こうして色々とケチが付いて回るような終わり方をした今回の戦争だがブリタニア軍とロシア軍が互いににらみ合っている貴重な時間の間に実島キサオは東北と北海道を纏め上げ九州中国四国近畿から流れてきた難民を東北から北海道へと受け入れを開始していた。

条約が発行するまでの短い間だけだが、難民を受け入れると同時に日本軍の残存兵力も同じく吸収した東北北海道は独立へ向け確かにその一歩を前進した。

ブリタニア軍が占領した日本はエリア11と名を変えブリタニアの11番目の植民地として日本は完全に滅んだかに見えた。

皇曆2010年十月

改めてロシア連邦と日本の領土分割についての話し合いがもたれた
がお互いに事実確認と相互承認だけに終わり、両者とも唯一陸続き
で国境を接することで軍事的な緊張感が高まる事が世界的に懸念さ
れた。

だが、今回の戦争は二転三転を繰り返したがその年の最後の月には
驚くべき宣言が出された。

エリア11トウキョウ租界近郊のゲットー

ブリタニアによって併合され日本人という名前と国を失い今はイレ
ブンと呼称される日本人達は、頂垂れる様にして廃墟と化した街の
彼方此方で焚き火を集め暖を取っていた。

十二月だというのに満足な水も食糧もなければ燃料も無い中、寒さ
に震える手足をすり合わせて寒い冬を越す一家の姿。

ここには日常を奪われ平穏をなくした者達が寒い冬の街で帰る所も
なく彷徨い続ける。

ラジオから流れるのは廃墟と化した街で未だに施設が生きている放
送局から流れる軽快な音楽が逆に彼等の惨めさを際立たせる。

巨大な壁の向こう側、現在ブリタニア軍に占領されている首都東京
の中心地では駐留するブリタニア兵が彼方此方で暖かいコートに身
を包みながら歩哨に立っていた。

すると突然ラジオの放送が切り替わり、軽快な音楽の代わりに男の
声が聞こえてきた。

どうせブリタニア軍が気まぐれにラジオ局の真似事でもしているの
だろうと、皆一応に別のチャンネルに切り替えようとしたその時。

「以上を持ちまして私実島キサオ日本のブリタニアからの独立と初
代東日本共和国首相に任命されたことをここに宣言するものであり
・・・・・」

いまなんと言ったか。

随分と遠い日々に思える彼等がまだ日本人として胸を張ってそう呼
んでいた頃の名前日本が再び彼等が聞く事になるとは。

ゲッターでラジオを聴いていたもの達は全員食い入るようにラジオ
の耳を傾けヴォリュームを最大まで上げた。

この放送はTV、ラジオ、ネットを通じ全世界に放送されており無
論トウキョウ租界の臨時総督府でもこの放送をTVを通して見てい
た。

来年にはブリタニア帝国皇子クロヴィス殿下を新総督として迎え
る準備に明け暮れていた総督にはこの放送はまったくの寝耳に水
であった。

「いったいこれはどう言うことだ。直に放送局と突き止めて即刻放
送を中止させる」

「いえ、それが場所は特定したのですがロシア軍占領下にある札幌市内なのです」

「な、なんだと。直に皇帝陛下にご連絡を、急げ！！」

ブリタニア王都ペンドラゴンの王座の広間には緊張の面持ちを浮かべた貴族たちが集まっていた。

玉座に座り苛立たしげな様子を隠すべくもなく、シャルル皇帝はTVモニターに映る実島という男、ではなくその後ろに控えるロシア兵に守られた一人の男に注目していた。

ブリタニア軍情報部が突き止めた男の名はエヴゲニー・ヴォリソビツチ。

ロシア連邦GRU所属であり、主に欧州で活躍していた諜報員でありロシアで最も冷酷な男とも呼ばれている。

他にこの男の詳しい経歴は漠然としているが何枚かの写真のうちゴルバチョフとの繋がりを持ち今ではウラジーミルの裏の顔として存在している。

そんな男が東日本共和国独立に関わっているとすれば、それは独立はロシア連邦のシナリオどおりということだ。

シャルル皇帝はそれが不機嫌でならないが、彼の真の目的の前には

些末な事でしかない。

だが、このままでも面白くはないのも事実。

ロシア連邦に対する制裁を考えつつ放送は終わった。

東日本共和国の独立宣言だがロシア連邦次いでEU、中東アフリカの衛星国が次々と支持を表明した。

中華連邦は静観の構えを見せ残るブリタニアは真っ向から対立するような事はせず直に軍を派遣できるよう準備したが、日本に駐留する極東軍とロシア太平洋艦隊、北方艦隊が出撃しブリタニアを牽制する。

ブリタニアとしては決して認められないが、これ以上対立を広げても益は無しと見たシュナイゼル皇子兼帝国宰相は一定の落とし所を模索することとなる。

だが皇帝シャルルの意を翻意することは適わず結局ブリタニア帝国は東日本共和国を黙殺し、無言の圧力でもって日本の独立を否定した。

東日本共和国はロシア、EUから経済援助を受け取りブリタニアに対する自由と独立を掲げ以後アジアの壁として活用されることとなる。

東日本共和国（後書き）

ロシア連邦のナイトメアフレームどうしよう……。

一応案としてはフロントミッションのヴァンツァーを考えているが果たしてギアスの世界観に合うかどうか。

東西分断

北海道札幌市内、東日本共和国建国宣言から内閣総理大臣となった実島キサオのもとには、日々様々な案件が持ち込まれその激務に耐えながらふと昔のことを思い出していた。

つい、半年も前の事なのに何年も前のように懐かしく感じられた日々。

枢木ゲンブ

ワンマンではあり国家よりも自分の保身を優先するような奴だったが、それでも首相になったその手腕は確かだった。

若い時は事あるごとに奴と対立したが、いつの間にか奴の勢力に取り込まれて、私もそれを不思議と嫌とは思わなかった。

こうして首相になってみて始めて分かったが、これは想像以上に重責だな。

奴が生きていたら丸ごと放り投げて本来組織の調整役である私は裏方に徹していたかったが、まあ今となってはそれも適わんか。

東北は戦争によるブリタニア軍の爆撃を殆ど受けなかったと事が幸いして、経済の基盤が最初から整っている。

まあ、有名どころのシリコンバレーはこちらにあるしブリタニアも戦後に手に入れたのが唯の焦土では旨みが少ないからな。

キョウトグループのメンバーを何人が引き込めたのもいい。

流石に富士一帯のサクラダイト採掘を手がける桐原財閥は無理であつたりしたが、現地でブリタニアに対して背面服従したりとまあ色々と仲良くはやっている。

コンコン

部屋の扉をノックする音で実島は思考の海から現実へと戻り、居住まいを正して、

「どうぞ」

と言った、

「失礼します。首相、国境を警備隊から至急首相宛てに連絡が届きました」

部屋に入ってきた秘書官から報告書を受け取りぱつと目を通して、私はそこに書かれていることに愕然とした。

「これは・・・本当なのか！？至急関係機関と連絡を取って事実確認を取ってくれ。それと万が一これが事実の場合対策会議を開く必要もある」

「ロシアの方には何と言いますか」

「恐らくロシアも現状静観するだろうが、万が一に備え動くかもしれません。最悪もう一度ロシア軍が大挙して東日本に渡ってくるぞ」

東日本独立のおり国家の主権と自決を尊重するとしてロシア軍は国境警備用の一部軍を残しシベリアへと引き上げていた。

旧日本軍を糾合し、ある程度纏まった戦力と対ブリタニア戦の経験豊富な指揮官を得た為、ロシアから供給された一世代前の兵器だが何とか軍としての形は保ってはいたが、ブリタニアの再度の侵略に耐えられるほどではない。

もしここで再びロシア軍の介入を招けば、今度は日本全土が焦土と化しかねない。

実島は部屋を出るとき、もう一度手元の報告書の写真を一瞥した。

「全く、これだから選民主義者は・・・」

何枚もの写真に克明に写る東日本共和国とブリタニア占領地（日本側の呼称）との国境に築かれる巨大な建造物。

そこで酷使されるナンバーズに落とされた同胞と、国境を塞ぐ巨大な壁とがこの国の未来を暗示しているようではなかった。

ナイトメア解析（前書き）

今回は作者お得意というか文才のない作者が文字数稼ぎに書く大まかな流れと解説の話になります。

ナイトメア解析

ロシア連邦モスクワ近郊の工場では、現在日本より回収されたブリタニアの新兵器KMFナイトメアフレームを分解解析を行っていた。

無論ブリタニアの新兵器ということもありブリタニア本国の防諜は完璧と言ってよかったが、戦場で偶々撃破された或いは鹵獲された物を極秘裏にロシア国内に運び現在国家の総力を挙げてこのブリタニアの新兵器の解明を行っている。

工場で働く研究者や技術者達はまるで新しいオモチャを与えられた子供のようにナイトメアフレームに群がり彼方此方に取り付いては装甲を剥がしたり中の計器から情報を吸いだしたりしていく。

元々旧ソビエト連邦から歩行兵器の案は長らく検討されており、悪名高きソコロフ研究所のシャゴホッド、グラニン研究所のメタルギアなど実際に試作された兵器も多数存在していた。

現在でこそ停滞気味であったが、その当時はあらゆる地形を走破し主に山岳地において大量にミサイル、ロケット攻撃可能な兵器とした歩行戦車として開発が進んでおり、その基礎技術があるロシアでは比較的早くナイトメアフレームの解析が終了する。

そしてブリタニアが作り上げた新兵器の性能に国防軍関連は戦慄した。

日本の山岳地攻略用に開発されたと思われたが、ファクトスファイアによる高度な索敵性能、スラッシュハーケンを用いた攻撃にも移動にも使えるワイヤー強度と機体のパワー。

そして何よりも一際目を引いたのが外付け高軌道駆動輪ランドスピ
ーナーであった。

地形を問わず走破する高性能と高機動、小型ゆえに驚くべき旋回能
力は今まで陸戦の王者であった戦車をも一部で凌駕する性能を持っ
ている。

軍民あわせてこの脅威に対抗する様々な手段が模索されそのそして
満場一致で決まった案が政府宛に出された。

曰く『ナイトメアはナイトメアをもって制すべし』

ウラジミール大統領はこの案を全面的に受け入れこうしてロシアで
ナイトメアフレームの開発がスタートした。

次いで現行の技術そのままでも製造が可能なブリタニアのナイトメ
アフレームコードネームグラスゴのコピーを生産し日本や各地の
衛星国に配備することも同時に決定された。

このコピー品のナイトメアの多くは日本に渡り現地で量産されたも
のは無頼と名づけられ東日本共和国正規軍のみならず、反ブリタニ
アテロリスト達によって大いに運用されていく。

ナイトメア解析（後書き）

原作よりも早く世界にナイトメアフレームが広がります。

それとこの世界観ではシャゴホッドやメタルギアは山岳地での火力を保有した歩行戦車の代わりです。

現在では全て解体されてはいますが、場合によっては物語に登場させるかも知れません。

ロシア戦（前書き）

行き成り交渉とか準備段階とかすっ飛ばして即開戦。

正直話を考えるのが面倒だったなんて言いません、舐めたマネをした奴には速攻宣戦布告がブリタニアクオリティー！！

ボラー連邦のテーマをかけながら書いたせいかなんだか物凄いことに・・・・・・。

ロシア戦

皇暦2013年

突如として神聖ブリタニア帝国がロシア連邦へと宣戦を布告。

同時にベーリング海峡に展開していた艦隊がロシア連邦海軍極東艦隊と激突し両軍とも百隻を超える近代戦争類を見ない大海戦で戦いの幕は落とされた。

ロシア連邦の衛星国である東欧ワルシャワ条約機構軍は臨戦態勢を発し、中東アフリカ諸国も是に倣う。

前々からブリタニアの侵攻を予想していたロシア連邦極東軍はブリタニアの上陸は避けられないとし、ウラジオストク港死守を念頭に置いた防衛ラインを構築し、それと同時にシベリア鉄道を使っているロシア陸軍百万の増援を得た。

質量共に揃ったブリタニアに対し、ロシア軍お得意の大量ミサイルによる飽和攻撃での殲滅を行う極東艦隊。

上空では制空権争いを賭けて両軍のありとあらゆる航空機が舞い、海中では潜水艦隊が音も無く忍び寄りながら激しい戦闘を繰り広げる。

ブリタニア海軍旗艦

「うっむ、イージス艦の処理能力限界を超える飽和攻撃を仕掛けるとは。流石は腐ってもロシア海軍か。予想以上に手強い」

「提督、ですが敵の攻撃がミサイルである以上何れ息切れは免れません。敵の波状攻撃が止み次第反撃に転ずるべきかと」

「いや参謀、それではこちらの被害も馬鹿にはならん。それにロシア潜水艦隊は未だに健在だ。それを放置してはベーリング海峡からの上陸など万が一揚陸艦隊に何かあった場合皇帝陛下に顔向けが出来ぬ。少し早いが例のアレ使ってみるか」

「アレですか。しかし本当に使い物になるのでしょうか？海戦の影響で海中は相当荒れていますか」

「かまわん。どうせここを乗り越えなければシベリア上陸やましてやモスクワなど夢のまた夢だ。多少の犠牲はやむ終えまい」

「はっ、了解しました」

ロシア極東艦隊

絶え間なく射出されるVLSと対艦ミサイルの嵐。

噴射炎で甲板が焼け爛れるかのような壮絶な光景がそこには広がっていた。

「同志ブリュネンコ提督、あと三十分ほどで全艦隊のミサイルが底を付きます」

「分かった、それでは三十分後予定通り最後の総攻撃を仕掛け我艦隊は一度補給艦隊と合流する」

と、そのときソナー員の緊張した声が響く。

「ソナーに感、これは……一体なんだ？」

「どうした、報告は明瞭にせよ同志」

「申し訳ありません同志参謀閣下。現在ソナーに正体不明の反応を四つ五つ、八つ……全部で十六確認しました。速度からして低速の魚雷のようですが」

「それなら捨て置き、万が一の場合はこちらの対潜ロケットの餌食にしてくれる」

だが、この時の判断が極東艦隊の運命を左右した。

ブリタニア軍の水中用ナイトメアフレームポートマンの改良型であるフロッグマンは、予備のポートマンを囷にして艦隊へと接近していたのだ。

「よし、連中はまだこちらに気がついてはいないな。ロシアの土民共に海は勿体無いと教えてやれ」

フロッグマンの背中に背負うように装備されたブリタニアの新兵器スーパークャビンテーション魚雷が発射される。

三十六機のフロッグマンからそれぞれ二本ずつ放たれた計七十二本の魚雷が時速100ノットを越える猛烈な速度で迫り回避する間も無く次々とロシア艦隊を海の底に沈めていく。

突如として海中に100ノットを越す魚雷が現われたことでロシア艦隊は動揺し、魚雷を回避する為に散会してしまったのが裏目に出してしまう。

この隙に艦隊の底に取り付いたフロッグマンは海面に躍り出て、通常のマニピレーターに代わりに三本の突起が付いた爪で駆逐艦に取り付き甲板へと這い上がる。

「食らえっ!!」

艦橋にスラッシュハーケンの一撃を受けた駆逐艦は戦力を喪失し、何機かはフランクすや速射砲に迎撃されて振り落とされるも艦隊は大混乱に陥っていた。

ブリタニア艦隊

「フロッグマンが予想以上に働いてくれます。提督ご命令を」

「よし、今だ全軍総攻撃を開始。ロシア海軍を撃滅しろ」

次々と放たれる対艦ミサイルに対艦装備をぶら下げた攻撃隊が空母から出撃する。

ロシア艦隊も負けじと対空砲火を打ち上げ、迎撃するも懐に入り込んだフロッグマンの攻撃に気を取られ効果的な迎撃が出来なかった。

そこに弾幕を突破した対艦ミサイル群が艦隊に迫りくる。

この攻撃で少なくない被害を出したロシア艦隊は不利を悟り撤退を決意。

追撃をさせないためにも最後の足掻きとばかりに対艦ミサイルによる攻撃を命じウラジオストクへと徹底していく。

ロシア艦隊提督

「たとえ私が肅清されようとも、ロシア艦隊は再び蘇る。その時こそブリタニアの地に今度は我等の旗が掲げられるのだ」

去り際にそういい残したと伝えられた提督は敗戦の責任を取り処刑されるも、以後ロシア海軍はブリタニアに対抗する為より大規模な軍拡を行うこととなる。

ロシア戦（後書き）

次回シベリア上陸初のナイトメアフレーム同士の戦いです。

因みにロシア軍のナイトメアはフロントミッションのザーフトラ、USN、OUCのどれかから選んでいこうかと考えています。

東シベリア上陸

ベーリング海峡海戦に勝利したブリタニア軍は少ない被害を受けつつも損傷艦を後方に下げ白の国ロシア連邦シベリアの地に遂に足を踏み入れた。

上陸からKMFの活躍目覚しく瞬く間に橋頭堡を確保し、本国でロールアウトされたばかりのサザーランドの性能も上々であった。

「これならいける」

上陸の指揮を取っていたブリタニア海軍提督はこの時そう思っていた。

そしてそれはある時点まで事実であった。

東シベリアを席卷したブリタニアKMF軍団は、制空権を握ったブリタニア空軍の支援のもと破竹の勢いでシベリア奥深くまで進軍を続けた。

シベリアの街々を植民地に置いたブリタニア軍はこの時油断していた。

自分達に勝てるもの無しと。

ロシア連邦極東シベリア軍区

「同志ポプチェフスキー司令。東シベリア全エリアから軍の引き上げが完了しました。また同時にシベリア鉄道より増援が明日にでも到着します」

「うむ宜しい。ブリキ共に本場の雪合戦がどういう物か、思い知らせてやる」

顎鬚を蓄え、ロシア帽を被った司令は野生的なその風貌の顔を獰猛な獣のようにゆがめ笑う。

「この母なる大地を蹂躪した償い、死を持って償うが良い。全軍出撃、反撃の時は来たぞ！！」

ポプチェフスキー司令の号令と共に、ウラルの峰峰に陣を構えたロシア軍が遂に真の姿を現す。

ブリタニア軍シベリア攻略軍G-1ベース車内

ブリタニア皇帝シャルルよりシベリア攻略を任されているバーミingham侯爵は鼻歌交じりに上機嫌で特別に皇帝より賜れた特別製のこのG-1の車内に設けられた豪華な椅子に座っていた。

「ふふふふ、我バーミingham家開闢より早三百四十七年、遂に遂にこのアルフレッド・フォン・バーミinghamの名が偉大な神聖ブリタニア帝国の歴史に名を刻む時が来た！！」

ははははは、と高らかに笑うバーミンガム卿の姿に流石に慣れたのか車内にいるブリタニア軍人は誰一人として気にも留めず自らの職務を全うする。

その様子に別段不機嫌になるでもないバーミンガム卿は今日は何時よりも上機嫌なのが災いして後三十分ほどは講釈を止めない様子だ。

だが流石は腐ってもブリタニア軍。

レーダーに異変を察知したブリタニア兵が直さま報告し、バーミンガム卿も先程までの馬鹿殿様見たいな様子はなりを潜め、ブリタニア軍を率いる将帥の顔を見せていた。

「何事か」

威厳のあるバーミンガム卿の声が車内に響く。

「はっ、哨戒に出ていた部隊の幾つかが連絡を断っているとの報告が来たと同時に強力なジャミングが発生しました。現在ECMを全力稼働中ですが複数方向からの電波で思うように部隊間の通信が取れなくなっています」

「成程、存外ロシアも戦上手という訳か。だがこちらの耳と目を潰したからと言って勝った気になっては困るな。直に全軍に警報を鳴らせ、伝令を出して各部隊との連携を密にする。それと敵のECM発生地点を特定しKMFを差し向ける」

「イエス・マイ・ロード」

バーミンガム卿乗艦の特別仕様G-1ベースはゆっくりと車輪を動か
かし、前線指揮の為前線へと進んでいく。

だが事は彼等が予想していた以上に早く進行していた。

既にこの時前線にはロシア軍のKMFが現われ前線は混乱状態に陥
っていたのだ。

ブリタニア軍前線

「クソっ、どうしてアサルトライフルが効かないんだ!!」

グラスゴーに乗るパイロットがアサルトライフルを両手で保持しな
がら銃を乱射するが、目の前の奇妙な形をしたKMFは一向に応え
た様子が無くこちらに大型ライフルを放つ。

機体を緊急回避させた衝撃で、コクピット内がミキサーのようにか
き回されるが何とか意識を保ちもう一度相手をよく観察する。

「なんだってんだよ!!アレは」

彼は前線で哨戒部隊に属していた。

今日もシベリアの肌を刺す寒い朝の中、針葉樹林地帯を三機のKM
Fと共に進んでいた。

三機とも通常兵装であるアサルトライフルと、スタントンファアを
装備し。

なら装甲車一二台、歩兵ならば二個分隊を楽に葬れる火力を持っていた。

日の出と共に始まった哨戒は、その日は何も無く終わり駐屯地へと帰還しようと思信を入れたとき異変は起きた。

「こちら第三十三哨戒大隊所属スカウト、通信兵聞こえるか。もう一度言っこちらスカウトどうぞ」

「どうだ繋がったか？」

「駄目だ何度か呼びかけているが一向に繋がらない。そっちはどうだ」

「こっちもだ、まさか三機とも通信機が故障なんて無いよな」

通信機越しに聞こえてくる僚機の不安そうな声がコクピットに響く。既に本体と連絡が取れなくなり三十分が経過し通信機をこのまま使い続けていけばあつという間にバッテリーが上がってしまう。

これが最新鋭のサザールランドなら性能も向上しているが、生憎と今ここにいるのはグラスゴーが三機。

ブリタニア初の本格的KMFだがお世辞にも操縦性はいいとは言えず、特に背中に背負うような形の箱型コクピットはキューポラのスキマから冷たい風が入り込み、ヒーターを全開にしても寒さで手が凍るほどだ。

「おい、何か見えたか」

現在は三機とも通信以外に必要な最低限の電力をカットし、針葉樹林に紛れるようにして簡単な偽装を施していた。

そのためレーダーもファクトスファイアも使えないため、態々外に出て双眼鏡とライフルを手に持ち、態々周囲の警戒をするはめになっている。

「こつちは今のところ異常が無いよ、それよりもコリヤ本格的にヤバイな。何時もの哨戒任務だから食糧もエナジーも弾薬予備を合わせて三日間しかないぞ。それにここは敵地だ、迂闊に火も焚けん」

双眼鏡を覗き込み、レンズの光が反射しないようシート被り周辺の草花を少しつけて簡単な偽装を施したブリタニア兵は、遅めの朝食代わりの硬い固形栄養食を嚙んでいた。

「うげ、それじゃあコーヒーが飲めないじゃないか」

「お前よくあのコーヒー飲めるな、不味くて飲めた代物じゃないぜ」

双眼鏡から目を離し、後ろの男に振り返ってヤレヤレというジェスチャーをする。

「いいんだよ、俺はカフェイン中毒なんだ。コーヒーがなけりゃ生きて気ねえよ」

「へいへいつと・・・!？」

再び双眼鏡を覗き込んだ男は針葉樹林の中キラリと鈍く光るのを見

逃さなかった。

「おい！！今直ぐKMFを起動しろ。不味いことになったぞ」

その様子から最悪の事態を連想したブリタニア兵は直さまKMFに乗り込み刺しっぱなしにしていた始動キーを入れる。

「早く、早くしろノロマめ！！」

悴んだ手で素早く機体の始動プロセスを行いつつ、何時もなら何気ないその行動が今は一秒でも惜しい。

「おい、早くコクピットを閉めろ！！奴等歩兵を連れてるぞ」

インカムから未だに外で双眼鏡を覗き込む男に向けて叫ぶ。

「もういい、お前も早くKMFにつ！！？」

だがその言葉を言い終わる事は出来なかった。

双眼鏡を目に痕が付くほど押し付け倍率を最大まで上げたその向こうに奴等は見えた。

明らかにブリタニア軍の歩兵装備とは違う兵装、ゆっくりと周囲を偵察しながら進む様子と先程の鈍い光を放った装甲車の機関砲が旋回し警戒している。

数はざっと二十名から三十名、装甲車のタイプと歩兵の装備からして威力偵察か何かかと思っただが、しかし疑問が浮かぶ。

開戦からブリタニア軍は破竹の勢いで既に東シベリアを席卷しロシア軍本隊はウラル山脈の向こう側に撤退したはずだ。

なのに妙に敵の装備が整いすぎている。

今まで戦ったような奴等とは違う明らかに訓練を受けたその動きに、もっと別の目的があるのではと一瞬双眼鏡から目を離れた事が彼の生死を分けた。

『もういい、お前も早くKMFにつ！?』

発砲音、大型コイルガンの特徴的な風切り音と正体を見極めようと身構えた事が運悪く、発射された大型ライフル弾を生身で受けた彼は永遠に相手の正体を知る機会を失った。

KMFに登場したブリタニア兵は、男の最後の瞬間を見る事無く既に偽装を解き散開する。

「クソっ、一人やられた。露助めよくもやりやがったな」

「落ち着け、奴等はこっちに気付いた。増援を呼ばれる前に早く逃げるんだ」

「でもよお」

だが、そうは問屋が降ろさない。

ロシア軍歩兵は直さま対KMF用の対戦車ロケットを装備すると囲い込むように走り出す。

肩に担いだRPGロケット弾が尾を引き爆炎を散らす。

しかしブリタニアのKMFには対人用の機銃が装備されている為迂闊に歩兵は近づこうとはせず、装甲車も遮蔽物に身を隠すようにして時折機関砲を撃って牽制する。

グラスゴーを操り、遮蔽物からライフルの銃口だけを向け牽制程度に一連射しなんとか方位網の突破口を見つけようとあがく。

激しい銃撃戦の最中、突如としてロシア歩兵が雪解けのように撤退していく。

「おい、こりゃあどういう事だ？」

「さて分かん。だが今のうちに遺体だけでも回収しておこう」

死んだ仲間の遺品を持ち帰ろうとしたその瞬間、けたたましいモーター音が針葉樹林にこだまする。

戦場に似つかわしくない、いや異質なその音と共に一本の木が切り倒された。

ブリタニアのKMFと同様人型のフォルムを持つが、首の部分がなく小さな隙間からカメラの部分が僅かにカエルの顔のような印象を受ける。

曲面を多様したボディに、鳥のような三本爪の足、貧弱そうで対弾性と空力を考えられたラインは一目見るからに機動力がありそうに見えた。

ブリタニアのKMFと違う点を上げるとすれば顔の部分と、ランドスピナーが装備されていない点、そして何よりも手に持つ巨大なチェーンソーの存在がブリタニアのKMFとは決定的に違う無骨な禍々しさのような雰囲気醸し出している。

「クソっ、今日は本当に厄日だぜ」

二機のグラスゴーが同時にライフルを構え、異形の人型兵器と対峙し、今ここの史上初のKMF同士の戦いが行われようとしていた。

東シベリア上陸（後書き）

ロシアの栄えある最初のKMFことザーフトラとドミトリーのアイドル。テラーンです。

KMFとの違いはランドスピナーの代わりに足裏のホイールによるローラーダッシュ。市街地における三次元機動よりも野外戦においての機動力を追求した設計。

スラッシュハーケンはおミットされており、コクピットも外に張り出した箱型ではなく機体内部に格納する方式を取っている。

基本武装はそれほど差は無いが、この時点で両肩にハードポイントを設けているため将来的に武装の幅が広がっている。

次も何か出して欲しいという感想がなければこのままザーフトラ製のもので勧めていこうかなと思っています。

シベリアの戦い

パトロール隊がロシア軍KMFと遭遇したのと時を同じくして、ブリタニア軍前線に突如としてロシア軍機甲部隊が襲い掛かる。

圧倒的投射量を誇る野戦自走砲大隊の援護の元ロシア軍歩兵が浸透する。

突然の奇襲で慌てふためくブリタニア軍の混乱を更に助長させるようにロシア軍KMFアバローナが戦線を蹂躪する。

「歩兵には構うな。このまま敵陣奥を突っ切るぞ」

ロシア軍第五十五機動歩行兵器大隊隊長イラー・イワノフ大佐はアバローナの上位機であるヴィーザフのコクピットで次々に指示を出す。

「ロケット大隊に砲撃支援を要請、敵陣地を吹き飛ばして突破口を開く。ブリキ野郎のKMFの出現情報に注意しろ」

右手に装備した大型ライフルを撃ち手持ちロケット砲所謂バズーカランチャーが敵を粉碎する。

朝食前のブリタニア軍は炊き出しを行っている為火災が発生し、煙で満足の司会が確保できない中唯逃げ惑うしかない。

だが、そんな彼等に遂に待ちに待った援軍が到着した。

十機のグラスゴーと四機のサザーランドがロシア軍KMFに銃を向

「っ！！」

「なんて固い奴だ。散会して後ろを取れ、ランサーを装備している機体を援護しろ」

野戦司令部

$$F \begin{matrix} \downarrow \\ \downarrow \\ \Delta \end{matrix}$$

ブリタニア K M ナイトメアフ

〓
 〓
 〓
 〓
 〓
 〓
 ▲

 ▲

 ▲

 ▲ロシア軍・KMF
 ナイトメアフリューム
 〓
 〓
 〓
 〓
 〓

▲
▲
▲
装甲車

▲ ▲ ▲ ロシア軍歩兵

■ ■ ■ ■ ■ ロシア軍自走砲大隊

「ブリタニア軍のKMFを確認、新型のサザーランドの姿もある。
全機対KMFフォーメーション」

第五十五大隊はイワコフ隊長の命令で直さま陣形を組み替える。

両手に分厚い盾のような鉄板を持つ機体が部隊の前に立ち、その後ろに隠れるようにKMGが付く。

重装備とは思えない軽快な機動性でブリタニア軍KMFとぶつかる
ロシア軍KMF大隊。

前衛が敵の攻撃を受け止めつつ、迂回し側面から攻撃しようとした
グラスゴーを後方に陣取った四脚型のKMFがスナイパーライフル
で狙い打つ。

前衛が敵を分断し、側面に回るKMFを後方が狙い打ち残りを包囲
殲滅する。

常に相手よりも数で上回るよう計算された動きにブリタニアKMF
は初のKMF同士の戦闘ということもあり勝手の分からない戦いで
見るも無残な姿を晒す。

それでもサザーランドを与えられた流石にエースか指揮官クラスは、スラッシュハーケンを前衛の盾に打ち込み引き寄せ相手の体勢を崩させ狙い打つという方法で戦果を挙げるも。

それ以外のKMFはライフルが効かないということで平静を失い部隊としては使い物にならない。

悔しいかな、KMFはブリタニア以外に作り出せないと驕った事の影響がここに来て出てしまう。

それでも相手を一機二機撃破し、一応の面目を立てたブリタニアKMFは直さま後方に撤退し、史上初の大規模KMF戦はロシア軍に軍配が上がる。

「よし、撤退する連中は追わなくていい。今は野戦司令部を落すことに集中しろ」

「了解」

この後イワコフ率いる第五十五大隊は野戦司令部を落とし、その功績によりロシア軍KMF初の勲章を授かることになる。

この戦いで戦線を後退せざるお得なくなったブリタニア軍は苦渋にまみれながらも本格的に逆襲の機会を伺うことになる。

灼熱の氷海

G-1ベースが前線に到着する前に既にブリタニア軍敗北の報を知ったバーミンガム侯爵は一敗地に塗れながらも名誉挽回の機会を伺うため前線を後退させ戦力の再編を図った。

帝都ペンドラゴンでもブリタニア軍の敗走の報は直さま届き皇帝シヤルルは崩壊する戦線を押しとどめるために更なる増援の派兵を決定。

ブリタニア全土から集められた延べ五十万もの兵力がベーリング海峡を船団を率い渡航する。

直さまそれを察知したロシア極東潜水艦隊は即座に全艦を出撃させブリタニア軍輸送船団へと襲い掛かる。

ウラジオストクに籠るロシア艦隊を包囲するブリタニア軍の包囲網を潜り抜けた潜水艦隊は、北海艦隊から派遣された北極海を通り合流した潜水艦隊と共に各地で壮絶な海戦を繰り広げる。

「魚雷一番から八番放射線状に発射！！」

「ソナーに感。水中投下音三、四、六、十！！」

「機関最大潜航。振り切れ」

「対潜ヘリ部隊が補給に帰艦します」

「ソナーに反応！！方位・・・・・・・・！！全方位から魚雷が」

「緊急回避！！」

「駄目です間に合いません！！」

轟音と共に荒波渦巻く冷たい海中へと泡立ちながらイージス艦が沈んでいく。

水中では人知れず潜水艦が僅かな亀裂から入り込んだ海水が瞬く間に船に満ち、鋼鉄の棺桶と化した潜水艦がベーリング海峡の底へと沈む。

「くっ、戦況を報告！！」

「敵潜水艦百隻からなる包囲網は以前突破できていません。既に大型輸送船五隻、中型輸送船二十八隻が被弾傾斜し救援を求めています」

「残った戦力は」

「本艦を含め駆逐艦八、ヘリ空母二、巡洋艦三です」

「当初三十隻を越える艦隊が僅か数日でこれか……………」

「！！海中で注水音。早い、スーパーキャビンテーション魚雷です」

「これは回避できん！！総員対ショック」

駆逐艦のCIWSが曳光弾の尾を引きながら海面を打つ。

幾つかの魚雷は光弾に絡め取られ船団手前で水柱を上げるが、それでも迎撃できなかった魚雷が船団へと突き刺さる。

「まだだ、まだ終わっていない！！更にスーパーキャビンテーション魚雷を五番から八番発射。タイフーン級は水中発射ミサイルで止めを刺してやれ」

ロシア海軍潜水艦のなかで火薬庫と称されるタイフーン級超大型潜水艦はロシア軍最高の静粛性を誇り二十基のミサイルサイロ、八門の魚雷発射管、世界中を無補給で潜水航行できる航続性能から戦略単位として位置づけられている。

現在では更にタイフーン級の次世代型としてボレイ級が開発中であり配備が開始されれば質量共に最強の戦略ミサイル攻撃型潜水艦隊が誕生する。

タイフーンかた発射された二十基ものミサイルが尾を引きながら船団へと迫る。

既に邪魔な駆逐艦戦隊を壊滅させたロシア潜水艦隊は止めの一撃として船団中央部で炸裂した。

従来のミサイルとは比較にならないほどの巨大な爆発が二十箇所同時に起こり生き残りの船団を含め海上は灼熱地獄と化した。

だがブリタニア軍もやられてばかりでは無い。

直さま対潜装備の攻撃機、対潜ヘリが戦場に到着し魚雷を投下する。流石に空中の敵相手に分が悪いロシア潜水艦隊は直さま撤退しよう

とするが戦場に急行したブリタニア海軍攻撃型潜水艦が急襲し、海戦は混戦の様子を見せていた。

二週間かけて行われた海戦の結果、ブリタニア軍の増援を阻むのを引き換えに極東潜水艦隊は壊滅。

虎の子のタイフーン級も二隻撃沈されるが、ブリタニア軍も外征艦隊能力を大きく削がれ、この結果に激怒したシャルル皇帝により軍の上層部が軒並み更迭され新たに軍の体制の一新が図られた。

ロシアでも今回の勝利とはいいがたい結果にウラジミール大統領は不機嫌になったが軍部は大統領の関心を買う為にシベリア極東軍に更なる攻勢を命じるはめと成った。

溶ける大地

極東軍区総司令官ポポチエフスキー大將はクレムリンからの命令を忠実に実行に移す為に更なる増援と物資の補給を要請し、それが裁可されると共に作戦計画の立案も同時に進行していた。

「先ずは現状からだが、ここシベリア軍区ブリタニアがエリア12などと言つふざけた名前が付いた地を奪還する。戦線各地にとげのように突き刺さったブリタニアの突出地点を両翼から締め上げるようにして包囲殲滅。作戦前の準備攻勢として一ヶ月間の砲爆撃を予定している」

ポポチエフスキー大將は作戦の概要を移したモニターを切り替え、別の地図を映し出す。

「第二段階として北海に停泊中のリムファクシ、シンファクシナイトメアフレ両艦からの長距離巡航ミサイルによる敵後方への攻撃、装甲機動歩兵師団第三、第八、第六は十二機師（T-90及びT-95を中心として機甲師団十二個の総称。極東軍の切り札とされる）と共に敵戦線を突破蹂躪しヤーヌスカまで進軍。敵は戦線を立て直す為に南に戦力を集中するが今度は北側のベオルグリードから南下し敵をここチエールスパースに包囲しこれを殲滅する」

モニターの一点から赤い線がブリタニア軍の戦線を突破しつつもわき腹を挟るようにして北上し。

青い線と点で表示されるブリタニア軍がヤーヌスカに殺到するとき北側のベオルグリードから黄色の点か矢印が出てブリタニア軍の後方を寸断する。

典型的な両翼からの包囲殲滅だが、広大なシベリアを維持する為に薄く長く普請しなければならぬブリタニア軍にとって突破力に優れる機甲師団とKMFとの連携は正に天敵であった。

「以上が作戦の骨子だ。何か質問はあるか」

「同志総司令官殿、この作戦ですとスピードが命です。作戦までの準備期間と戦力集中を加味すると敵に我々の意図を気付かれてしまうのではないでしょうか」

「同志ミハエル。それは全て計算のうちに入っている。シベリアの冬に慣れていないブリタニア軍はまず間違いなく消耗する。そして我々にとって母なる大地の化粧はそのまま我々を姿を隠す偽装ともなる。敵に気付かれることなく戦力を集中しそして敵が弱り春になったとき奴らの目の前には我らロシア軍二百万の軍靴が聞こえることだろう」

「はっ、同志閣下。自分が短慮でありました」

「では大体の方針は決まったな。詳細は参謀に任せる」

こうしてロシア極東軍の反攻作戦が着々と進んでいった。

ナイト・オブ・ラウンズ

ポポチェフスキー將軍の作戦は上手く行った。

大地の子であるロシア軍人にとって、軟弱なブリタニア兵など取るに足らず、各地で寸断包囲殲滅し、急速にその失地を回復していた。

虎の子の十二機師はその突破力を遺憾なく発揮し、ヤーヌスカ五十キロの地点にまで迫っていた。

同時に、ロシア軍が対ブリタニア戦を想定して作られた地下ネットワークから武器を供給された民兵が後方で激しいゲリラ活動を行いブリタニアはエリア12全域に混乱が広まるのを唯見ていることしか出来なかった。

バーミンガム侯爵もゲリラの凶弾に倒れ、指揮権を受け継いだ参謀はただ手をこまねく事しか出来ず、ブリタニア軍の醜態に益々激怒したシャルル皇帝は遂に帝国の誇り、ナイト・オブ・ラウンズの投入を決定する。

派遣されるのはナイトオブワンビスマルク・バルトシュタイン、ナイトオブファイブホープ・マゼラン、ナイトオブテンルキアーノ・ブラッドリーの三人であり、帝国の力と誇りの象徴であるラウンズを一つの戦線に同時に三人も投入する事にいかにシャルル皇帝が本気を物語っていた。

並びに、帝国宰相シュナイゼルを総司令官として派遣するなど正にブリタニア最強の布陣でロシア戦に臨んだ。

シャルル皇帝の命を受け直に準備を整えたシュナイゼルとラウンズ達は援軍を引きつれシベリアに上陸。

そこからブリタニアの反撃が始まった。

各地に宣戦の綻びをラウンズを投入して塞ぎ、混乱するブリタニア軍をシュナイゼルが立て直すまでシベリアの全戦線をほぼ三人のラウンズだけでカバーするなど、その獅子奮迅の活躍にブリタニア軍の士気は大いに上がり、またロシア軍が予想したよりも早く混乱を収拾したシュナイゼルは全軍に総反撃を命じる。

本国で開発されている第六世代の試作品を手にはラウンズ達が前線を切り開く。

圧倒的力、最早英雄伝説がそのまま現代に蘇ったかのような光景に、誰しもが羨望と畏敬と畏怖の念を抱かずには入れなかった。

結果ポプチェフスキーの反攻作戦は失敗に終わり、シュナイゼルも補給の兼ね合いから前線は再び膠着状態へと陥った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0696x/>

コードギアス～ロシアより愛を込めて～

2011年12月19日13時47分発行